

連邦議会での離任演説 (1951年)

ダグラス・マッカーサー

朝鮮戦争の処理を巡り、マッカーサー連合軍最高司令官とは幾度となく激論が交わされていた（マッカーサーは中国を直接引き入れ、蒋介石を支援に取り込むことを望んだ）のでトルーマンによるマッカーサーの解任は予想外のことはなかったが、衝撃を和らげることはなかった。知らせは不幸な形でマッカーサーのもとに届いた。辞任によって先を越されることを恐れ、トルーマンは公式通知がマッカーサーに届く前に決定を公表した。トルーマンは通常の軍の経路で通知することを望まなかったため、韓国を通じた迂回路を使わざるを得ず、そのため送達が遅れたからだ。



ダグラス・マッカーサー将軍

1951年4月11日午後3時、マッカーサーはノースウエスト航空の社長ウィリアム・スターンズと上院議員ウォーレン・マグナソンとの会食を終えようとしていた。

シッド・ハフは午後3時のニュースで知らせを聞き、マッカーサー夫人に電話で連絡した。丁度その時、ハフはオマール・ブラッドリーから直接公電も受け取り、それを持って居宅に向かったが、そこにはもうすでに記者たちが群がっていた。電報を読むと、マッカーサーは素っ気無く言った。「ジーニー、やっと帰れるぞ」

5日後、午前6時半、マッカーサーは自宅を出て羽田空港に向かった。およそ25万人の人々が、空港に続く12マイルの道に10列もの列を作っていた。1時間後、「パターン」と改称された—以前はSCAPと呼ばれていた—飛行機に乗り、マッカーサーはハワイ、サンフランシスコに向けて飛び立った。

1951年4月19日、ワシントンDCの上下院の合同会議に出席したマッカーサーは、退任に際しての演説を行った。

上院議長閣下、下院議長閣下、ならびに連邦議会議員の皆様

私は深い謙虚さと大きな誇りを感じつつ、この演壇に立っています。これまでに、ここに立った米国の歴史の偉大な構築者たちのことを思えば、謙虚にならざるを得ません。立法府の議論が行われるこの場所が、これまでで最も純粋な形で人間の自由を体現していることを思えば、誇りを覚えざるを得ません。ここには全人類の期待と願望と信義が凝縮しています。私はいかなる党派的な大義の唱道者としても、ここ

に立ってはいません。なぜなら、争点となっているのは根本的な問題であり、党派的な考慮の範囲を大きく超えるものであるからです。我々の進む道が健全であることを証明し、我々の未来を守ろうとするなら、これらの問題は最高水準の国益に基づいて解決されなければなりません。従って、私がここに述べることは、同じ一米国国民が熟慮した見解を表明しているものと、皆様が正当に受け止めてくださることを確信しています。

人生のたそがれ時にここで演説するにあたり、私には何の遺恨も苦渋もありません。心にあるのは、ただ1つ、国のために尽くすという目的だけです。諸課題は世界的な規模に広がり、あまりにも深く絡み合っているため、ほかの側面を気にも止めずに1つの側面だけを検討することは、全体の破綻を招くことでしかありません。アジアは一般的に欧州への玄関口と呼ばれていますが、それに劣らず欧州がアジアへの玄関口であることもまた事実です。一方の広範な影響が他方に及ばないことはあり得ません。わが国の軍力は、この2つの前線を守るには不適切であり、我々の努力を分割することはできない、と言う人がいます。これは敗北主義の表明の最たるものです。もし仮想敵国がその軍力を2つの前線に分けることができるのなら、それを迎え撃てばいいのです。共産主義の脅威は地球規模のもので、共産主義が一つの地域で進出に成功すれば、他のすべての地域が破壊される恐れがあります。アジアで共産主義に譲歩、あるいは降伏することは、同時に欧州においてその進出を阻む我々の努力を無駄にすることになります。

こうした一般的な道理を指摘した上で、アジア全般のことに限って論じたいと思います。いま存在している状況を客観的に評価するには、その前に、アジアの過去と、現在までに際立ってきた革命的な変化について、多少なりとも理解しておかなければなりません。アジア諸国の国民は、いわゆる植民地勢力から長い間搾取されてきており、フィリピンにおけるわが崇高な米国統治が指針としてきた社会正義や個人の尊厳、生活水準の改善などを、達成する機会をほとんど与えられてきませんでした。そしてようやく、先の戦争に植民地主義の足かせから解放される機会を見出しました。今、新たな機会の到来と、これまで感じる事のなかった尊厳と、政治的自由に根ざす自尊心を目の当たりにしているわけです。

地球の人口の半分と、天然資源の60パーセントが集まったこの地域で、アジアの人々は物心両面で新たな力を急速に結集させており、これを用いて生活水準を向上させ、近代化の構想を確立し、自らの独特の文化的環境に適合させようとしています。植民地化の概念に執着する人がいようとまいと、これがアジアの進む方向であり、この動きを止めることはできません。これは世界経済の辺境が移動することの当然の帰結であり、世界情勢の全体的な中心は、巡り巡って、それが始まった地域に戻るものなのです。

このような状況において、わが国としては、植民地時代がすでに過去のものになった以上、アジア諸国の国民が自力で自由な運命を形作る権利を切望しているという事実を目を背ける路線を取るのではなく、こうした基本的な進化の状況に共鳴するように、自国の政策を合わせていくことが死活的に重要になります。彼らが今求めているのは、友好的な指導、理解、支援であり、尊大な指図ではありません。尊厳ある対等であり、隷属という恥辱ではないのです。彼らの戦前の生活水準は哀れなほど低いものでしたが、戦争が終わった今、戦争の残した惨禍で、生活水準は果てしなく悪化しています。世界中のさまざまなイデオロギーはアジア人の思考にほとんど影響を及ぼしていませんし、理解もされていません。アジアの人々が求めているのは、少しだけ多くの食糧を胃袋に入れること、少しだけまともな衣服を身に着けること、少しだけ頑丈な屋根の下で寝起きすること、そして政治的自由を求める正常な民族的欲求を実現する機会

を得ることなのです。このような政治的・社会的状況は、わが国の安全保障にとって間接的な意味しかありませんが、それは目下の計画の背景をなすものであり、我々が非現実主義の落とし穴を回避しようとするなら、それを慎重に検討しなければなりません。

わが国の安全保障により直接的な意味を持つのは、先の戦争中に起きた、太平洋の戦略的潜在能力の変化です。それまでは、米国の西方の戦略的国境は、文字通り、南北アメリカ大陸の境界線であり、危険にさらされた戦線の突出部として、ハワイ、ミッドウェー、グアムを経てフィリピンまでつながる島々がありました。この戦線の突出部は、わが国の強力な前哨地ではなく、敵がここを通過して攻撃することができる、そして実際に攻撃してきた、わが国の弱さを示す道であることが分かりました。

太平洋は、隣接する陸地を攻撃する意図を持った略奪軍にとって、潜在的な進攻地域でした。この状況は、我々の太平洋での勝利で一変しました。そして、わが軍の戦略的辺境は移動して太平洋全域を取り囲み、保持する限りわが国を守る広大な濠（ほり）となりました。実際それは、アメリカ大陸全体と太平洋地域にあるすべての自由な土地にとっては、防御用の盾の役割を果たしています。わが国と自由な同盟諸国が所有する、アリューシャン列島からマリアナ諸島までアーチ状に延びる一連の島々によって、我々はアジアの海岸までの太平洋地域を支配しています。この一連の島々から我々は、海軍力と空軍力によって、ウラジオストクからシンガポールに至るすべてのアジアの港を支配し一線り返しますが、海軍力と空軍力によって、ウラジオストクからシンガポールまでのすべての港を支配し一太平洋に敵対的な動きが入り込むのを阻止することができます。

アジアからの略奪的な攻撃は上陸作戦になるに違いありません。進路上にあるシーレーンとその上空を統制下に置かずに、上陸攻撃を成功させることはできません。我々が海軍力と空軍力の優位と、基地を守るある程度の陸軍部隊を擁していれば、アジア大陸からわが国への、あるいは太平洋の友邦への大規模な攻撃は、すべて失敗に終わるでしょう。

こうした状況下では、太平洋はもはや、潜在的な侵略者が近づく危険な通り道にはなりません。逆に、穏やかな湖の親しげな様相を帯びています。わが国の防衛線は自然のものであり、最低限の軍事的努力と軍事費で維持することができます。それは、いかなる相手に対する攻撃も想定しておらず、進攻作戦に不可欠な要塞も備えていませんが、適切に維持すれば、侵略に対する無敵の防御手段となるでしょう。この文字通りの防衛線を西太平洋に維持することができるかどうかは、そのすべての部分を維持できるかどうかにかかっています。非友好的な力によってこの防衛線が一部でも大きく破られれば、ほかのあらゆる主要部分が決定的な攻撃を受けることになるでしょう。

私の知る限り、この軍事的評価に対しては、いまだにいかなる軍の指導者も異議を唱えたことがありません。だからこそ私はこれまで、軍事的な緊急事として、いかなるであろうとも台湾を共産主義者の支配下においてはならない、と強く勧告してきたのです。もしそうした事態になれば、直ちにフィリピンの自由が脅威にさらされ、日本を失い、我々の西方の最前線はカリフォルニア、オレゴン、ワシントン各州の沿岸部まで後退を余儀なくさせられるでしょう。

いま中国大陆で見られる変化を理解するためには、過去 50 年間にわたる中国人の気質と文化の変化を理

解しなければなりません。50年前までの中国は、全く均質性を持たず、互いに意見が対立するいくつかのグループに分かれていました。彼らは儒教の理想である平和主義的文化の教えに従っていたため、戦争を起こすような性向はほとんどみられませんでした。ところが20世紀の初め、張作霖政権下で均質性を高める努力が行われた結果、民族主義的な衝動が生まれました。蒋介石の指導のもと、この衝動をさらに大きく広げることには成功しましたが、それが現政権下で見事に結実し、いまでは、より支配的で攻撃的な性向を持つ統一した民族主義の性格を帯びるという事態に至っています。

こうして過去50年の間に、中国人は軍国主義的な概念と理想を持つようになりました。彼らは現在、有能な参謀と指揮官を持つ、優秀な兵士になっています。これによって、アジアに新たな強大な勢力が生み出されました。この勢力は、独自の目的のためにソ連と同盟を結んでいますが、思想と手段の面では帝国主義的な好戦性を高めており、この種の帝国主義につき物の、領土拡張と力の増大を渴望しています。

中国人の気質には、いかなるものであれ、イデオロギー的な概念はほとんどありません。生活水準があまりにも低く、戦争によって資本の蓄積があまりにも完全に消失させられてしまったため、大衆は絶望しており、地方の窮乏を多少なりとも軽減してくれそうな指導者であれば、誰にでも喜んで従おうとしています。

私は最初から、中国共産党による北朝鮮支援は決定的なものだと考えていました。今のところ、彼らの利害はソ連と軌を一にしています。しかし、朝鮮半島だけでなく、インドシナやチベットでも近年示され、いまや南に向けられている攻撃性は、太古の昔から、征服者たらんとする者を駆り立ててきた、力の拡大への欲望の表れにほかならない、と私は思います。

戦後、日本国民は、近代史に記録された中では、最も大きな改革を体験してきました。見事な意志と熱心な学習意欲、そして驚くべき理解力によって、日本人は、戦後の焼け跡の中から立ち上がって、個人の自由と人間の尊厳の優位性に献身する殿堂を日本に打ち立てました。そして、その後の過程で、政治道徳、経済活動の自由、社会正義の推進を誓う、真に国民を代表する政府が作られました。

今や日本は、政治的にも、経済的にも、そして社会的にも、地球上の多くの自由な国々と肩を並べています。世界の信頼を裏切るようなことは2度とないでしょう。最近の戦争、社会不安、混乱などに取り巻かれながらも、これに対処し、前進する歩みをほんの少しも緩めることなく、共産主義を国内で食い止めた際の見事な態度は、日本がアジアの趨勢に非常に有益な影響を及ぼすことが期待できることを立証しています。私は占領軍の4個師団をすべて朝鮮半島の戦場に送りましたが、その結果、日本に生じる力の空白の影響について、何のためらいもありませんでした。結果はまさに、私が確信していた通りでした。日本ほど穏やかで秩序正しく、勤勉な国を知りません。また、人類の進歩に対して将来、積極的に貢献することがこれほど大きく期待できる国もほかに知りません。

かつてわが国が後見していたフィリピンについては、現在の混乱が消え、長期にわたる戦争の恐ろしい破壊の、より長い余波の中から、強く健全な国が生まれると、確信をもって期待することができます。我々は、辛抱強く理解を示し、決して彼らを失望させてはいけません。私たちが必要としているときには、彼らは私たちが失望させなかったのですから。キリスト教国であるフィリピンは、極東におけるキリスト

教の強大な防波堤となっており、アジアにおいて道徳的に強いリーダーシップを発揮する無限の力を秘めています。

台湾に関しては、中華民国政府は、中国大陸における同国政府の指導力を大きく損なった悪意あるゴシップの大半について、行動によって反論する機会を得ました。台湾の人々は、政府機関に多数派が代表を出すという公正で賢明な政権を戴いており、政治的にも、経済的にも、社会的にも、健全で建設的な路線に沿って進んでいるようです。

以上、周辺地域について短い洞察を加えた上で、朝鮮半島での軍事衝突に話を転じたいと思います。大韓民国を支援して介入するという決定が大統領が下す前に、私はなんら相談を受けていませんでした。その決定は、わが軍が侵略者を押し戻し、その軍事力の多くを減殺したことにより、軍事的な観点から正しかったことが証明されました。わが方の勝利は決定的だったし、目的の達成は目前だったのですが、そこへ共産中国が、数の上では上回る陸軍力で介入してきたのです。

この中国介入によって、新たな戦争と、全く新しい状況が作り出されました。それは、北朝鮮の侵略者に対してわが軍が投入されたときには考えもしなかった状況です。そして軍事戦略を現実的に即して修正するために外交面で新たな決定が求められる状況となりました。

そうした決定は、いまだ下されそうもありません。

地上部隊を中国大陸に送り込むことに正気で賛成する人はいないでしょう。実際、そうしたことは、一度も検討されませんでした。しかし状況が一変した今、かつての古い敵を倒したように、この新たな敵を打ち破ることがわが国の政治目標であるならば、戦略計画の根本的な変更が緊急に迫られていたのです。

私が見たところ、鴨緑江の北にいる敵に与えられた保護された聖域を無力化することが軍事上必要だったほか、戦争を進める上で、次のようなことが必要だと感じました。第1は、中国に対する経済封鎖の強化です。第2は中国沿岸部に対する海上封鎖。第3は、中国沿岸地域と満州に対する航空偵察制限の撤廃。そして第4は、台湾の中華民国軍に対する制限を撤廃し、共通の敵に対して同軍が有効な作戦を取ることができるような、兵站面での支援を行うことでした。

これらのすべての見解は、朝鮮半島に送られたわが軍を支援し、米国および同盟諸国側の無数の人命を損なうことなく、できるだけ早い時期に戦闘行為を終わらせることを意図して、職業軍人の立場で考えたものでした。軍事的な観点からみると、わが国の統合参謀本部を含め、朝鮮戦争に関わったほぼすべての軍事指導者が、過去にこれと同じ見解を持っていたと私は理解しています。にもかかわらず、こうした考えを抱いたことで、私は主に海外の素人筋から、厳しく批判されてきました。

私は増援を求めましたが、援軍は得られないことを知らされました。もしも鴨緑江の北に敵が建設した基地を破壊することが認められないということであれば、もしも台湾にいる約60万の友好的な中国軍を利用することが認められないということであれば、もしも中国共産党が外部から援助を受けられないようにするために中国沿岸を封鎖することが認められないということであれば、そして、もしも大規模な増援を

送ってもらえる見込みがないということであれば、軍事的にみて、勝利を妨げたのは司令部の態度であると私は明言しました。

途切れることなく作戦行動を続ければ、韓国でも、わが軍の補給線が強く敵の補給線が弱い周辺地域では、敵を抑えることができたでしょう。しかし、もし敵が全軍事力を用いた場合、せいぜい我々に期待できるのは、わが軍をひどく消耗させ続ける、決定力に欠けた軍事作戦だけだったのです。この問題の解決に不可欠な新たな政治判断を、私は絶えず要求してきました。

私の立場を歪曲させるための努力も行われました。要するに私は、好戦主義者であると言われてきたのです。これほど、事実から遠いことは、ほかにありません。私は、いま生きている誰よりも、戦争については知っています。私にとっては、これほど嫌悪すべきものは、ほかにありません。私は長年にわたり、戦争の完全な撲滅を訴えてきました。敵も味方も破壊するがゆえに、戦争は国際紛争の解決手段としては無用なものになってしまったからです。実際、1945年9月2日、日本が戦艦ミズーリ号上で降伏文書に署名した直後、私は次のように公式に警告しました。

「人間は、有史以来、平和を求めてきた。国家間の紛争を防ぐ、あるいは解決する国際手続きを作り出すため、さまざまな方法が時代を超えて試されてきた。個々の市民に関しては、当初から実現可能な方法が見つかった。しかし、より広い国際的な広がりを持つ手段の仕組みは、一度も成功したことがなかった。軍事同盟、勢力均衡、国際連盟など、すべてが次から次へと失敗に終わり、残されたのは戦争という厳しい試練を経る道だけだった。いまや戦争の徹底的な破壊力によって、この選択肢も閉ざされてしまった。今が最後のチャンスだ。もっと優れた公平な制度を我々が作り出さなければ、ハルマゲドンは玄関口に迫ってくるだろう。問題は、基本的に神学的なものであり、過去2000年の科学、芸術、文学、そして物質的、文化的発展の、比類のない前進と同調する、精神的再生と人間性の改善に関係している。肉体を救おうとするなら、それは精神を通してである」

しかし、いったん戦争が我々に押し付けられれば、これを迅速に終わらせるためには、使えるすべての手段を使う以外に選択肢はありません。

戦争の目的は、まさに勝利であり、中途半端な状態を長引かせることではありません。

戦争では、勝利に代わるものはありません。

さまざまな理由を掲げて、共産中国と宥和しようとする人がいます。彼らは、歴史の明白な教訓に対して盲目なのです。なぜなら、宥和政策は新たな、さらに血なまぐさい戦争を招くだけだということ、歴史ははっきりと強調して教えているからです。このような結果をもたらす手段が正当化されるような例、宥和政策が見せかけの平和以上の成果をもたらした例は、歴史上1つもありません。脅迫と同様、宥和政策は、より大きい新たな要求を次々に招く原因となり、最終的には、脅迫と同じように、暴力が唯一の取りうる選択肢となってしまいます。

私は、兵士たちから聞かれました。「なぜ戦場の敵に、軍事的な有利さを明け渡してしまうのですか」私

は答えられませんでした。

紛争が中国との全面戦争にまで拡大するのを避けるためだ、と言う人がいるかもしれません。また、ソ連の介入を防ぐためだ、という人もいるでしょう。どちらの説明も正当な根拠があるとは思えません。なぜなら、すでに中国は、全兵力を投入して交戦しているからであり、ソ連は必ずしも自らの行動を我々の動きに合わせてくれようとしなからずです。新たな敵も現れるでしょう。彼らは、コブラのように、世界的な規模でみて、自分たちの軍事その他の力が相対的に有利であると感じれば、すぐに攻撃を仕掛けてくるでしょう。

朝鮮での悲劇は、その国境線の中に軍事行動が限定されていることによって、さらに高められています。我々が救わんとするこの国が、海と空からの大規模爆撃による破壊に苦しんでいるのに、敵の聖域は、そうした攻撃や破壊から完全に守られているのです。

世界中の国で、これまでのところすべてを賭して共産主義と戦ってきたのは韓国だけです。韓国人の勇気と不屈の精神は見事であり、筆舌に尽くせません。

彼らは、奴隷になるよりも死の危険を冒すことを選びました。彼らの私に対する最後の言葉は「太平洋を見捨てないでほしい」でした。

私は、戦地で戦う皆様の息子たちを朝鮮半島に残してきたところです。彼らはそこであらゆる試練に耐えてきました。彼らはあらゆる意味において優れていると、私は今、なんのためらいもなく、皆様に報告することができます。

私は彼らを守り、この残酷な戦闘を、誇り高く、最小限の時間と人命の犠牲で終らせるよう、常に努力してきました。流血の増大は、私に、この上なく深い苦悩と不安をもたらしました。

私はこのような勇ましい兵士のことをしばしば思い起こし、いつも祈りをささげることになるでしょう。

私は今、52年にわたる軍務を終えようとしています。今世紀に入る前に私が陸軍に入隊したとき、それは私の少年時代の希望と夢が成就した瞬間でした。私がウェストポイント（陸軍士官学校）で兵士になる宣誓をして以来、世界は何度も向きを変え、希望や夢はずっと前に消え失せてしまいました。しかし、当時兵営で最も人気が高かったバラードの一節を今でも覚えています。それは誇り高く、こう歌い上げています。「老兵は死なず。ただ消え去るのみ」と。

そしてこのバラードの老兵のように、私もいま、私の軍歴を閉じ、消え去ります。神が光で照らしてくれた任務を果たそうとした1人の老兵として。

さようなら。

出典： "A History of the American Ambassador's Residence in Tokyo" by Jonathan R. McHale Embassy Tokyo, 1995.

Farewell Address to Congress (1951)

Douglas MacArthur

Mr. President, Mr. Speaker, and Distinguished Members of the Congress:

I stand on this rostrum with a sense of deep humility and great pride—humility in the weight of those great American architects of our history who have stood here before me; pride in the reflection that this home of legislative debate represents human liberty in the purest form yet devised. Here are centered the hopes and aspirations and faith of the entire human race. I do not stand here as advocate for any partisan cause, for the issues are fundamental and reach quite beyond the realm of partisan consideration. They must be resolved on the highest plane of national interest if our course is to prove sound and our future protected. I trust, therefore, that you will do me the justice of receiving that which I have to say as solely expressing the considered viewpoint of a fellow American.

I address you with neither rancor nor bitterness in the fading twilight of life, with but one purpose in mind: to serve my country. The issues are global and so interlocked that to consider the problems of one sector, oblivious to those of another, is but to court disaster for the whole. While Asia is commonly referred to as the Gateway to Europe, it is no less true that Europe is the Gateway to Asia, and the broad influence of the one cannot fail to have its impact upon the other. There are those who claim our strength is inadequate to protect on both fronts, that we cannot divide our effort. I can think of no greater expression of defeatism. If a potential enemy can divide his strength on two fronts, it is for us to counter his effort. The Communist threat is a global one. Its successful advance in one sector threatens the destruction of every other sector. You can not appease or otherwise surrender to communism in Asia without simultaneously undermining our efforts to halt its advance in Europe.

Beyond pointing out these general truisms, I shall confine my discussion to the general areas of Asia. Before one may objectively assess the situation now existing there, he must comprehend something of Asia's past and the revolutionary changes which have marked her course up to the present. Long exploited by the so-called colonial powers, with little opportunity to achieve any degree of social justice, individual dignity, or a higher standard of life such as guided our own noble administration in the Philippines, the peoples of Asia found their opportunity in the war just past to throw off the shackles of colonialism and now see the dawn of new opportunity, a heretofore unfelt dignity, and the self-respect of political freedom.

Mustering half of the earth's population, and 60 percent of its natural resources these peoples are rapidly consolidating a new force, both moral and material, with which to raise the living standard and erect adaptations of the design of modern progress to their own distinct cultural environments. Whether one ad-

heres to the concept of colonization or not, this is the direction of Asian progress and it may not be stopped. It is a corollary to the shift of the world economic frontiers as the whole epicenter of world affairs rotates back toward the area whence it started.

In this situation, it becomes vital that our own country orient its policies in consonance with this basic evolutionary condition rather than pursue a course blind to the reality that the colonial era is now past and the Asian peoples covet the right to shape their own free destiny. What they seek now is friendly guidance, understanding, and support -- not imperious direction -- the dignity of equality and not the shame of subjugation. Their pre-war standard of life, pitifully low, is infinitely lower now in the devastation left in war's wake. World ideologies play little part in Asian thinking and are little understood. What the peoples strive for is the opportunity for a little more food in their stomachs, a little better clothing on their backs, a little firmer roof over their heads, and the realization of the normal nationalist urge for political freedom. These political-social conditions have but an indirect bearing upon our own national security, but do form a backdrop to contemporary planning which must be thoughtfully considered if we are to avoid the pitfalls of unrealism.

Of more direct and immediately bearing upon our national security are the changes wrought in the strategic potential of the Pacific Ocean in the course of the past war. Prior thereto the western strategic frontier of the United States lay on the literal line of the Americas, with an exposed island salient extending out through Hawaii, Midway, and Guam to the Philippines. That salient proved not an outpost of strength but an avenue of weakness along which the enemy could and did attack.

The Pacific was a potential area of advance for any predatory force intent upon striking at the bordering land areas. All this was changed by our Pacific victory. Our strategic frontier then shifted to embrace the entire Pacific Ocean, which became a vast moat to protect us as long as we held it. Indeed, it acts as a protective shield for all of the Americas and all free lands of the Pacific Ocean area. We control it to the shores of Asia by a chain of islands extending in an arc from the Aleutians to the Mariannas held by us and our free allies. From this island chain we can dominate with sea and air power every Asiatic port from Vladivostok to Singapore -- with sea and air power every port, as I said, from Vladivostok to Singapore -- and prevent any hostile movement into the Pacific.

Any predatory attack from Asia must be an amphibious effort. No amphibious force can be successful without control of the sea lanes and the air over those lanes in its avenue of advance. With naval and air supremacy and modest ground elements to defend bases, any major attack from continental Asia toward us or our friends in the Pacific would be doomed to failure.

Under such conditions, the Pacific no longer represents menacing avenues of approach for a prospective invader. It assumes, instead, the friendly aspect of a peaceful lake. Our line of defense is a natural one and can be maintained with a minimum of military effort and expense. It envisions no attack against anyone, nor does it provide the bastions essential for offensive operations, but properly maintained, would be an

invincible defense against aggression. The holding of this literal defense line in the western Pacific is entirely dependent upon holding all segments thereof; for any major breach of that line by an unfriendly power would render vulnerable to determined attack every other major segment.

This is a military estimate as to which I have yet to find a military leader who will take exception. For that reason, I have strongly recommended in the past, as a matter of military urgency, that under no circumstances must Formosa fall under Communist control. Such an eventuality would at once threaten the freedom of the Philippines and the loss of Japan and might well force our western frontier back to the coast of California, Oregon and Washington.

To understand the changes which now appear upon the Chinese mainland, one must understand the changes in Chinese character and culture over the past 50 years. China, up to 50 years ago, was completely non-homogenous, being compartmented into groups divided against each other. The war-making tendency was almost non-existent, as they still followed the tenets of the Confucian ideal of pacifist culture. At the turn of the century, under the regime of Chang Tso Lin, efforts toward greater homogeneity produced the start of a nationalist urge. This was further and more successfully developed under the leadership of Chiang Kai-Shek, but has been brought to its greatest fruition under the present regime to the point that it has now taken on the character of a united nationalism of increasingly dominant, aggressive tendencies.

Through these past 50 years the Chinese people have thus become militarized in their concepts and in their ideals. They now constitute excellent soldiers, with competent staffs and commanders. This has produced a new and dominant power in Asia, which, for its own purposes, is allied with Soviet Russia but which in its own concepts and methods has become aggressively imperialistic, with a lust for expansion and increased power normal to this type of imperialism.

There is little of the ideological concept either one way or another in the Chinese make-up. The standard of living is so low and the capital accumulation has been so thoroughly dissipated by war that the masses are desperate and eager to follow any leadership which seems to promise the alleviation of local stringencies.

I have from the beginning believed that the Chinese Communists' support of the North Koreans was the dominant one. Their interests are, at present, parallel with those of the Soviet. But I believe that the aggressiveness recently displayed not only in Korea but also in Indo-China and Tibet and pointing potentially toward the South reflects predominantly the same lust for the expansion of power which has animated every would -- be conqueror since the beginning of time.

The Japanese people, since the war, have undergone the greatest reformation recorded in modern history. With a commendable will, eagerness to learn, and marked capacity to understand, they have, from the ashes left in war's wake, erected in Japan an edifice dedicated to the supremacy of individual liberty and

personal dignity; and in the ensuing process there has been created a truly representative government committed to the advance of political morality, freedom of economic enterprise, and social justice.

Politically, economically, and socially Japan is now abreast of many free nations of the earth and will not again fail the universal trust. That it may be counted upon to wield a profoundly beneficial influence over the course of events in Asia is attested by the magnificent manner in which the Japanese people have met the recent challenge of war, unrest, and confusion surrounding them from the outside and checked communism within their own frontiers without the slightest slackening in their forward progress. I sent all four of our occupation divisions to the Korean battlefield without the slightest qualms as to the effect of the resulting power vacuum upon Japan. The results fully justified my faith. I know of no nation more serene, orderly, and industrious, nor in which higher hopes can be entertained for future constructive service in the advance of the human race.

Of our former ward, the Philippines, we can look forward in confidence that the existing unrest will be corrected and a strong and healthy nation will grow in the longer aftermath of war's terrible destructiveness. We must be patient and understanding and never fail them -- as in our hour of need, they did not fail us. A Christian nation, the Philippines stand as a mighty bulwark of Christianity in the Far East, and its capacity for high moral leadership in Asia is unlimited.

On Formosa, the government of the Republic of China has had the opportunity to refute by action much of the malicious gossip which so undermined the strength of its leadership on the Chinese mainland. The Formosan people are receiving a just and enlightened administration with majority representation on the organs of government, and politically, economically, and socially they appear to be advancing along sound and constructive lines.

With this brief insight into the surrounding areas, I now turn to the Korean conflict. While I was not consulted prior to the President's decision to intervene in support of the Republic of Korea, that decision from a military standpoint, proved a sound one, as we hurled back the invader and decimated his forces. Our victory was complete, and our objectives within reach, when Red China intervened with numerically superior ground forces.

This created a new war and an entirely new situation, a situation not contemplated when our forces were committed against the North Korean invaders; a situation which called for new decisions in the diplomatic sphere to permit the realistic adjustment of military strategy.

Such decisions have not been forthcoming.

While no man in his right mind would advocate sending our ground forces into continental China, and such was never given a thought, the new situation did urgently demand a drastic revision of strategic planning if our political aim was to defeat this new enemy as we had defeated the old.

Apart from the military need, as I saw It, to neutralize the sanctuary protection given the enemy north of the Yalu, I felt that military necessity in the conduct of the war made necessary: first the intensification of our economic blockade against China; two the imposition of a naval blockade against the China coast; three removal of restrictions on air reconnaissance of China's coastal areas and of Manchuria; four removal of restrictions on the forces of the Republic of China on Formosa, with logistical support to contribute to their effective operations against the common enemy.

For entertaining these views, all professionally designed to support our forces committed to Korea and bring hostilities to an end with the least possible delay and at a saving of countless American and allied lives, I have been severely criticized in lay circles, principally abroad, despite my understanding that from a military standpoint the above views have been fully shared in the past by practically every military leader concerned with the Korean campaign, including our own Joint Chiefs of Staff.

I called for reinforcements but was informed that reinforcements were not available. I made clear that if not permitted to destroy the enemy built-up bases north of the Yalu, if not permitted to utilize the friendly Chinese Force of some 600,000 men on Formosa, if not permitted to blockade the China coast to prevent the Chinese Reds from getting succor from without, and if there were to be no hope of major reinforcements, the position of the command from the military standpoint forbade victory.

We could hold in Korea by constant maneuver and in an approximate area where our supply line advantages were in balance with the supply line disadvantages of the enemy, but we could hope at best for only an indecisive campaign with its terrible and constant attrition upon our forces if the enemy utilized its full military potential. I have constantly called for the new political decisions essential to a solution.

Efforts have been made to distort my position. It has been said, in effect, that I was a warmonger. Nothing could be further from the truth. I know war as few other men now living know it, and nothing to me is more revolting. I have long advocated its complete abolition, as its very destructiveness on both friend and foe has rendered it useless as a means of settling international disputes. Indeed, on the second day of September, nineteen hundred and forty-five, just following the surrender of the Japanese nation on the Battleship Missouri, I formally cautioned as follows:

“Men since the beginning of time have sought peace. Various methods through the ages have been attempted to devise an international process to prevent or settle disputes between nations. From the very start workable methods were found in so far as individual citizens were concerned, but the mechanics of an instrumentality of

larger international scope have never been successful. Military alliances, balances of power, Leagues of Nations, all in turn failed, leaving the only path to be by way of the crucible of war. The utter destructiveness of war now blocks out this alternative. We have had our last chance. If we will not devise some greater and more equitable system, Armageddon will be at our door. The problem basically is theological and involves a spiritual recrudescence and improvement of human character that will synchronize with our almost matchless advances in science, art, literature, and all material and cultural developments of the past 2000 years. It must be of the spirit if we are to save the flesh.”

But once war is forced upon us, there is no other alternative than to apply every available means to bring it to a swift end.

War's very object is victory, not prolonged indecision.

In war there is no substitute for victory.

There are some who, for varying reasons, would appease Red China. They are blind to history's clear lesson, for history teaches with unmistakable emphasis that appeasement but begets new and bloodier war. It points to no single instance where this end has justified that means, where appeasement has led to more than a sham peace. Like blackmail, it lays the basis for new and successively greater demands until, as in blackmail, violence becomes the only other alternative.

”Why,” my soldiers asked of me, ”surrender military advantages to an enemy in the field?” I could not answer.

Some may say: to avoid spread of the conflict into an all-out war with China; others, to avoid Soviet intervention. Neither explanation seems valid, for China is already engaging with the maximum power it can commit, and the Soviet will not necessarily mesh its actions with our moves. Like a cobra, any new enemy will more likely strike whenever it feels that the relativity in military or other potential is in its favor on a world-wide basis.

The tragedy of Korea is further heightened by the fact that its military action is confined to its territorial limits. It condemns that nation, which it is our purpose to save, to suffer the devastating impact of full naval and air bombardment while the enemy's sanctuaries are fully protected from such attack and devastation.

Of the nations of the world, Korea alone, up to now, is the sole one which has risked its all against communism. The magnificence of the courage and fortitude of the Korean people defies description.

They have chosen to risk death rather than slavery. Their last words to me were: "Don't scuttle the Pacific!"

I have just left your fighting sons in Korea. They have met all tests there, and I can report to you without reservation that they are splendid in every way.

It was my constant effort to preserve them and end this savage conflict honorably and with the least loss of time and a minimum sacrifice of life. Its growing bloodshed has caused me the deepest anguish and anxiety.

Those gallant men will remain often in my thoughts and in my prayers always.

I am closing my 52 years of military service. When I joined the Army, even before the turn of the century, it was the fulfillment of all of my boyish hopes and dreams. The world has turned over many times since I took the oath on the plain at West Point, and the hopes and dreams have long since vanished, but I still remember the refrain of one of the most popular barrack ballads of that day which proclaimed most proudly that "old soldiers never die; they just fade away."

And like the old soldier of that ballad, I now close my military career and just fade away, an old soldier who tried to do his duty as God gave him the light to see that duty.

Good Bye.

